筑波大学人間系心理学域
杉江 征

Development, reliability, and validity of the Assimilation and Accommodation of Meaning Making Scale

Ryo Horita^{*1} and Masashi Sugie^{*2}

(^{*1} Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba,

*2 Division of Psychology, Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba)

Interest in meaning making following stressful life experiences has continued to increase. However, there are to date, no instruments to assess the process of meaning making. Therefore, the Assimilation and Accommodation of Meaning Making Scale (AAMS) was developed to measure the orientation and strategy of assimilation and accommodation during the meaning making process. Moreover, the reliability and validity of the scale were investigated. Undergraduate students ($N=726$) participated in the study. Explorative factor analysis of their responses to the newly developed AAMS revealed two factors. Moreover, the scale was internally consistent. Examining the relationship between the AAMS and other scales verified the concurrent and construct validity of the AAMS. These results suggested that the AAMS has sufficient reliability and validity. The limitations of the study and possible uses of the scale are discussed.

Key words: meaning making, assimilation, accommodation, stressful life experiences, scale

問題

人は辛く、悲しい体験をしたときに、どのようなことを感じ、考え、受け入れ、そして乗り越えていくのであろうか。ロゴセラピーの創始者である Frankl (1969 山田監訳, 2002) が、人間の基本的動機づけとして“意味への意志”を提唱したように、人は自己の存在を脅かされるような出来事、つまりストレスフルで危機的な状況に晒されると、その後の適応や人生に対する有意味感を回復させるために、新たな意味づけを行うよう動機づけられると考えられる。近年、臨

床心理学の研究領域において、あるストレスフルな出来事に直面した後の適応過程を説明する概念として“意味づけ (meaning making)” が提唱され、注目されている。

意味づけに関する研究は、これまで喪失体験の意味づけに関する検討を中心に行われてきた。Freud (1917 井村・小此木 他訳, 1970) が提唱した“喪の仕事 (mourning work)”や Kübler-Ross (1969 川口訳, 1971) が提唱した“5段階説 (five stages of grief)”などは、意味づけを含む一連の作業といえる。また Neimeyer (2002 鈴木訳, 2006) は、喪失体験における“意味の再構成 (meaning reconstruction)”

を提唱し、自身の喪失体験をどのように理解し、どのように意味づけをするのか、そして自身の人生をどう構築し直すのかを考えるプロセスを理論化している。こうした悲嘆からの回復過程において、意味づけは重要な要素であることが言われている (Nerken, 1993)。

1980年代以降は臨床心理学をはじめ、ポジティブ心理学、社会心理学、感情心理学などさまざまな領域において意味づけに関する研究が行われるようになり、意味づけの対象とするストレスフルな出来事も、障害や疾病、自然災害、トラウマ体験など多岐にわたるようになった。そのため多くの知見が蓄積してはきたものの、さまざまな概念や理論モデルが提出されるようになり、その定義も研究間で異なっていた。

そこでPark (2010) はストレスフルな出来事の意味づけに関する詳細なレビューを行い、“統合的意味づけモデル (integrated model of meaning making)” を提唱し、これまで提出されてきた概念の精緻化を行っている。この理論モデルによれば、あるストレスフルな出来事を体験したときに、人はまず出来事の評価を行う。その評価と個人が持つ信念などを表す“包括的な意味 (global meaning)” との間に不一致、矛盾が起これば、人は“意味づけの過程 (meaning making processes)” へと動機づけられる。そして意味づけの過程を経た結果として、“生成された意味 (meaning made)” が得られ、包括的な意味の一部となっていくというプロセスを辿る。Park (2010) が提唱したこのモデルによって、これまで個別に検討が行われてきた意味づけに関する概念を一連のプロセスとして整理することができる。

統合的意味づけモデルを基にこれまでの意味づけ研究を鑑みると、成長感を中心とする生成された意味と、その後の適応との関連の検討が多く行われていると理解できる。とくにTedeschi & Calhoun (1996) が提唱したPosttraumatic Growth (以下PTG: 外傷体験後成長感) は、The Posttraumatic Growth Inventoryという尺度も開発され、実証的かつ体系的に検討が行われてきた (たとえば、Gangstad, Norman, & Barton, 2009; Phelps, Williams, Raichle, Turner, & Ehde, 2008)。これまではPTGを多く感じるほど、その後の適応や精神的健康は高まるという知見が多く提出され

てきたものの、近年ではPTGを代表とする生成された意味が、その後の適応に影響を与えない、もしくはネガティブな影響を与えるという研究結果も少なからず報告されてきている (たとえば、Pakenham, 2008; Widows, Jacobsen, Booth-Jones, & Fields, 2005)。

こうした一貫しない研究結果に対する説明として関心を集めているのが、Park (2010) の理論モデルで言う“意味づけの過程”である。つまり意味づけた結果を示す、生成された意味よりも、個人がどのような対処を行ったのかという意味づけの過程こそが重要であるとの指摘がなされ、そのプロセス解明の必要性が主張されるようになってきている (Frazier, Tennen, Gavian, Park, Tomichi, & Tashiro, 2009; 羽鳥・小玉, 2009; 松下, 2008; Park, 2010)。

意味づけの過程に関しては、これまでJanoff-Bulman & Frantz (1997) の“理解としての意味づけ (meaning as comprehensibility)” と“意義の意味づけ (meaning as significance)” や、Davis, Nolen-Hoeksema & Larson (1998) の“意味の付与 (making sense)” と“利得の発見 (finding benefit)” などの概念が提唱され、プロセスの分類が行われてきた。しかし、“意義の意味づけ” や“利得の発見” は意味づけの過程と言うよりも、意味づけの結果すなわち生成された意味を示す概念であるとも考えられる。そこで、Joseph & Linley (2005) は、トラウマ体験から回復し成長に至るまでのプロセスをより明確にする理論として、有機体価値理論 (Organismic valuing theory) を提出している。この理論では、意味づけの過程を同化と調節という明確な2つのプロセスに分類している。また同化と調節は、ストレスフルな体験後のポジティブな変容だけではなく、ネガティブな変容とも関連が検討されており、これら両側面から検討することで、意味づけという現象をより多面的かつ包括的に捉えることができると考えられる。

同化と調節では、あるストレスフルな出来事を経験すると、人々が日常的に抱えている自己や世界に対する認識である假定世界 (assumptive world) が脅かされ (Janoff-Bulman, 1992; 安藤, 2009)、この假定世界がストレスフルな出来事によって崩壊した時に、“なぜこんな出来事が起きたのだ”、“なぜ私なんだ”

といった問いを通して、人は意味づけに動機づけられるとしている (Burnell & Burnell, 1989)。安藤 (2009) は、“假定世界のゆらぎが一時的で、最終的には假定世界の中で理解できること”を同化とし、“假定世界による理解を超えているため、認知的、感情的に処理する過程”を調節と定義している。Davis & Morgan (2008) は、同化とは“自身が持つ世界観や自己感に一致するように出来事を再解釈すること”であり、調節とは“その出来事によって示唆された新しい情報を取り入れるように自身の世界観や自己観を変化させること”であると定義している。

同化とは新しい出来事をあらかじめ存在している假定世界に取り入れることであり (Block, 1982; King & Hicks, 2006)、比較的自動的に起こるものであるとされている。一方で調節は、出来事を経験したときに假定世界が打ち破られ、意味システムを修正、改訂する必要に迫られることであり (Janoff-Bulman, 1992)、より意図的で努力を要する過程であると言える (King & Hicks, 2009)。

これまで同化と調節に関しては、Folkman & Moskowitz (2000) が、調節を問題焦点型コーピングとして捉えており、Brandstadter (2002a) は、ストレスfulな出来事が重大であるほど調節を行うと指摘している。また調節のみがPTGを導くことや (Joseph & Linley, 2005)、調節のほうがwell-beingの増加や抑うつ傾向の低下をもたらすこと (Brandstadter, 2002b; Davis, Wortman, Lehman, & Silver, 2000)、といった生成された意味やその後の適応との関連も指摘されている。しかしこれらの研究はいずれも仮説生成を目的とした理論的検討に留まっている。したがって、意味づけの過程に関する実証的な研究が求められており (Payne, Joseph, & Tudway, 2007)、意味づけの過程を測定する尺度の開発が、仮説やモデルの検討を行うためには必要であると考えられる。

そこで本研究は、意味づけの過程について、同化と調節の観点から実証的な検討が可能になるよう、“意味づけにおける同化・調節尺度”を作成し、信頼性、妥当性を検討することを目的とする。意味づけの過程を実証的に検討するための尺度を開発することは、意味づけ研究において課題とされている意味づけの過程

の解明に寄与することであり、かつこれまでそのような実用的な尺度はなかったことから、本研究の意義は大きいと考えられる。また意味づけの過程を明らかにすることは、重大なライフイベントの体験後の適応的なストレスコーピングを究明するものであり、精神的健康の回復、維持、増進に繋がる視点を提供しうる。したがって本研究は、健康心理学的観点からも重要であると言える。

予備調査

実際にストレスfulな出来事が起きてから、個人がどのような対処を行っていくのかを把握することと、尺度作成にあたり、意味づけにおける同化と調節に関する項目収集を行うことを目的に、2010年10月に、国立大学の学生15名 (男性10名、女性5名、平均年齢21.26歳、 $SD=1.03$) に対して、1対1の半構造化面接を実施した。所要時間は45分から1時間20分であった。

面接調査は、Payne et al. (2007) の手続きを参考にした。インフォームドコンセントを経た後に、開示可能な挫折体験を1つあげてもらい、その体験を経験してから現在に至るまでの、感情、認知、思考、行動、対処について幅広く聴取した。具体的には、“挫折体験を経験した時に、どのようなことを感じたり考えたりしましたか”、“挫折体験を経験してから、あなたはどんな対処をしましたか”といった質問を用いた。とくに調査協力者が、挫折体験後に、自身の物事の見方や考え方を維持する、もしくは変えるような発言があった場合は、そのプロセスについて正確に理解できるよう聴取した。質問内容は調査の統一性を図るため事前にリスト化したが、できるだけ自然な会話形式でやりとりがなされるようにリスト以外の質問も適宜用いた。面接内容は承諾を得たうえで録音され、事後にテキストデータ化された。

面接調査から得られた発言内容を、既述した先行研究で用いられている同化と調節の定義に従って整理した。その結果、同化に関する発言では、“原因というか理由がすんなり見つかった”や“別に深く考え込んだりはしなかった”など“早期の原因発見”と“非関

与的な対処様式”があると考えられた。一方で調節に関する発言では、“自分のこれまでの考え方を改める必要性があると感じた”や“色んな可能性を模索した”など“新たな視点獲得の必要性の認知”と“体験に対する積極的な関与”があると考えられた。これらの分類に基づき、発言内容をできるだけ忠実に再現するように項目案を作成し、臨床心理学を専攻する大学教員1名、大学院生4名が内容的妥当性の検討を行った。最終的に、同化と調節に関して各4項目ずつ、計8項目の項目案を作成した。

本調査

予備調査の結果を踏まえ、“意味づけにおける同化・調節尺度”を作成し、信頼性、妥当性を確認することを目的に本調査を行った。信頼性としては内的整合性を確認した。妥当性としては構成概念妥当性を確認した。

本調査では、安藤 (2009), Davis & Morgan (2008), Joseph & Linley (2005), King & Hicks (2009) の定義を参考に、同化を“自身が持つ物事の見方や考え方に一致するように自然とその体験を解釈、理解できること”, 調節を“その体験を理解、解釈するために意識的、意図的な認知、感情的処理を行い、自身が持つ物事の見方や考え方を修正していくこと”と定義した。また意味づけ研究では、対象とする出来事を分類、限定して検証する必要性が論じられていることから (羽鳥, 2008), 本調査でも、挫折体験の意味づけについて検討することとした。挫折体験は北村 (1983) の定義を参考に、“ある目的や目標、期待を持って行ったこと、続けてきたことが途中でくじけ折れ、強いネガティブ感情を伴う体験で、経験した個人が主観的に判断した体験”と定義した。挫折体験を選定した理由としては、挫折は発達段階において多かれ少なかれ体験されていることが言われており (永井, 1993; 杉浦, 1997), 本調査の調査対象とする大学生においても、一度は体験したことがある可能性が高いと予測できるからである。

本調査の目的を達成するために、以下の3つの仮説を設定した。(a) 調節は自身の物事の見方や考え方の

修正をしていくので、挫折体験に対してとくに時間をかけて関わっていくと考えられる。したがって調節は認知的熟慮性と正の相関がある。(b) Folkman & Moskowitz (2000) は調節を問題焦点型コーピングとして捉えているので、両者には正の相関がある。(c) Brandstadter (2002) は、ストレスフルな出来事が重大であるほど調節を行うと指摘していることから、挫折体験を重大であると認知するほど調節を多く行う。一方で重大ではないと捉えられるほど同化を多く行う。

方 法

手続き・調査時期

2010年11月に無記名・個別記入形式の質問紙調査を実施した。

調査協力者

インフォームドコンセントを経て、関東地方に所在する国立・私立大学の学生726名 (男性394名, 女性331名, 不明1名, 平均年齢19.90歳, $SD=1.59$) が調査に参加した。

調査内容

挫折体験 意味づけの対象となる挫折体験を抽出するために以下の質問を用いた。(a) 今までに経験した“一番大きな挫折体験”の回答を求めた。挫折体験がどのような体験を示すか明確にするために、本調査で用いる挫折体験の概念的定義を提示した。挫折体験の内容に関しては、調査協力者へ心理的負担や不快感を生じさせる可能性があると考え、具体的な記述は求めなかった。回答は、神谷・伊藤 (1999) を参考に、“学業のこと (受験や学校でのテストなど)”, “人間関係のこと (恋愛、友人関係など)”, “継続してきたこと (スポーツ、部活動、習い事、夢など)”, “その他”という領域を用い、選択式で回答を求めた。(b) 挫折体験を経験してからの“経過年月”について回答を求めた。(c) 予備調査で得られた回答から、本調査では挫折体験を経験しての“主観的な辛さ”と、その経験の人生における“重要度”と、挫折体験の“予測不可

能性”が挫折体験の重大さを規定する要因として認められると考え、回答を求めた。回答は“その出来事を経験した当時”の時点での評価を求め、それぞれ5件法によって評定を求めた。各得点が高い程、回答した個人が主観的に辛いと感じており、人生において重要な出来事で、その出来事を予測することが難しかったことを表している。構成概念妥当性の確認を行うために、同化、調節と、(c) であげた3つの変数との関連を検討した。

意味づけにおける同化・調節尺度（暫定版） あるストレスフルな出来事を経験したときに、自身の持つ物事の見方や考え方と照らし合わせ、どのように評価し、どのように対処していこうとするかといった志向性や対処方略について、同化と調節という2つの観点から測定する尺度である。項目の選定に際して、以下の3つの方法により、全21項目の暫定版を作成した。(a) 予備調査で作成した8項目を用いた。(b) King & Hicks (2009) で用いられている質問項目を参考に同化4項目、調節3項目の計7項目を作成した。(c) 島井・大竹 (2005) が作成した日本版“人生の意味”尺度を参考に同化3項目、調節3項目の計6項目を作成した。この尺度の原版となるMLQ (Meaning in Life Questionnaire: Steger, Frazier, Oishi, & Kaler, 2006) は、人生の意味づけについて同化と調節の観点から回答を求めた尺度であると言われている (King & Hicks, 2009)。21項目を作成した後に、再度、臨床心理学を専攻する大学教員2名、大学院生4名で内容的妥当性の検討を行った。回答は、現在の考えではなく、経験した当初の考えを問うものであった。したがって“あなたがあげた挫折体験を経験した当初に、以下のようなことをどれくらい考えましたか。当時の考えを振り返り、出来事を経験した当初のあなたの考えとして、最も当てはまるものを1つ選んで○をつけてください”と教示した。質問項目は、“1. 当てはまらない”、“2. あまり当てはまらない”、“3. どちらとも言えない”、“4. 少し当てはまる”、“5. かなり当てはまる”の5件法で回答を求めた。

熟慮性 挫折体験に対して、時間をかけて積極的に関わっていったかどうかを測定するものとして、滝間・坂本 (1991) の認知的熟慮性—衝動性尺度を用

いた。原版では日常的な事柄について判断をする際の熟慮性について評定を求めているが、本調査では回答した挫折体験に対する熟慮性について評定を求めため、教示を一部改変した。1因子構造が確認されており、合計得点が高いほど、認知的熟慮性が高いと判断する。全10項目からなり、4件法で回答を求めた。

コーピング 挫折体験に対して、どのような対処方略を用いたかを測定するものとして、尾関 (1993) のコーピング尺度を用いた。原版では“現在最も強くストレスを感じていること”をあげさせるが、本調査では回答した挫折体験に対しての対処について評定を求めた。仮説 (b) では、問題焦点型コーピングのみについて言及したが、同化と調節の特徴について探索的に検討するために、情動焦点型コーピング、回避・逃避型コーピングについても測定した。全14項目からなり、4件法で回答を求めた。

結 果

因子構造の検討

まず、意味づけにおける同化・調節尺度21項目の平均値と標準偏差を算出した。その結果、すべての項目において各項目の平均値 $\pm 1SD$ が得点圏(1—5)におさまっており、天井効果および床効果は見られなかった。次に21項目に対して最尤法・Promax回転による因子分析を行った。因子数は仮説に基づいて2に固定したが、それぞれの因子は解釈が可能で、2因子が妥当であると判断された。因子負荷量が.40に満たない項目と両方の因子に対して高い因子負荷量を示した項目の計7項目を削除した。その結果、14項目で2因子構造を持つ意味づけにおける同化・調節尺度が作成された (Table 1)。累積寄与率は50.63%であった。

第1因子は7項目で構成されており、“私はその経験の持つ意味を見つけようと思っている”、“これまでの考え方を改める必要があると感じている”など、意識的、意図的な対処を通じた自身の物事の見方や考え方の修正を表している項目が高い負荷量を示した。そこで“調節”因子と命名した。第2因子は7項目で構成されており、“その経験が持つ意味を理解するのに時間はかからないだろう”、“その経験が意味すること

Table 1 意味づけにおける同化・調節尺度の因子分析結果

項目内容	F1	F2
〈第1因子：調節 ($\alpha=.84$)〉		
1 私は、その経験が持つ意味を見つけようと思っている ^{c)}	.81	-.05
2 私はその経験を理解しようと思おうと思う ^{b)}	.79	-.02
3 私はその経験の持つ意味を何とかして理解しようとしている ^{b)}	.78	-.07
4 私は、その経験を有意義にする何かを探している ^{c)}	.64	.09
5 自身の物事の見方や考え方を直す必要があると感じている ^{a)}	.57	.04
6 自分の視野を広げることが、その経験の意味を理解するには必要である ^{a)}	.55	-.02
7 これまでの考え方を改める必要があると感じている ^{a)}	.40	.05
〈第2因子：同化 ($\alpha=.82$)〉		
8 その経験が持つ意味を理解するのに時間はかからないだろう ^{a)}	-.22	.80
9 私は、すぐにその経験が持つ意味に気づくだろう ^{a)}	.05	.74
10 その経験が持つ意味についてすぐに原因(理由)を見つけられるだろう ^{a)}	-.10	.68
11 私は、その経験が持つ意味を見出している ^{c)}	.18	.67
12 その経験を理解するのに、私の持つ物事の見方、考え方を利用することができるだろう ^{b)}	.22	.48
13 その経験は、私がこれまで持っていた物事の見方、考え方を通して理解することができるだろう ^{b)}	.02	.46
14 その経験が意味することは私が持つ物事の見方、考え方に合致している ^{b)}	.14	.40
因子間相関		
	F1	F2
	—	.44
	F2	—

a) 予備調査から作成された項目

b) King & Hicks (2009) を参考に作成された項目

c) 島井・大竹 (2005) を参考に作成された項目

は私が持つ物事の見方、考え方に合致している”など、自身が持つ物事の見方や考え方を通した体験の理解を表している項目が高い負荷量を示していた。そこで“同化”因子と命名した。

信頼性の検討

抽出された“調節”と“同化”の尺度得点の信頼性を検討するために、クロンバックの α 係数を算出し、内的整合性を確認した。その結果、“調節”で $\alpha=.84$ 、“同化”で $\alpha=.82$ と十分な値が得られた。したがって尺度の一貫性は実用に耐えうるレベルであると判断した。各因子に相当する項目の平均値を算出し、“調節”下位尺度得点 ($Mean=3.39, SD=.83$)、“同化”下位

尺度得点 ($Mean=3.13, SD=.79$) とした。“調節”と“同化”は有意な正の相関を示した ($r=.41, p<.001$)。

構成概念妥当性の検討

認知的熟慮性との関連 意味づけにおける同化・調節尺度と認知的熟慮性-衝動性尺度との関連を検討するために相関分析を行った。“同化”と“調節”因子は有意な相関が見られたため、“同化”下位尺度得点と“調節”下位尺度得点を共変量として、それぞれ統制し、“同化”と“認知的熟慮性”、“調節”と“認知的熟慮性”の偏相関係数を算出した (Table 2)。その結果、“調節”と“認知的熟慮性”の間に有意な極めて弱い正の偏相関が見られた ($r=.12, p<.05$)。一方

Table 2 調節・同化と認知的熟慮性、コーピングとの偏相関係数

	認知的 熟慮性	問題 焦点型	情動 焦点型	回避・ 逃避型
調節	.12*	.25***	.21**	-.07
同化	-.01	.10	.24***	.16**

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$ **Table 3** 調節・同化と挫折体験の重大さとの偏相関係数

	主観的な辛さ	重要度	予測不可能性
調節	.20***	.27***	.08*
同化	-.16***	-.05	-.26***

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.10$

で“同化”と“認知的熟慮性”との間には有意な偏相関は見られなかった ($r=-.01, n.s.$)。

コーピングとの関連 意味づけにおける同化・調節尺度とコーピング尺度との関連を検討するために相関分析を行った。コーピング尺度についても同様の理由で、偏相関係数を算出した (Table 2)。その結果、“調節”と“問題焦点型”の間には有意な弱い正の偏相関が見られた ($r=.25, p<.001$)。また“情動焦点型”との間にも有意な弱い正の偏相関が見られたが ($r=.21, p<.01$)，“回避・逃避型”との間には有意な偏相関は見られなかった ($r=-.07, n.s.$)。一方で“同化”と“問題焦点型”の間には有意な偏相関は見られなかった ($r=.10, n.s.$)。また“情動焦点型”との間には有意な弱い正の偏相関が見られ ($r=.24, p<.001$)，“回避・逃避型”との間にも許容される程度の値ではあるが、有意な正の偏相関が見られた ($r=.16, p<.01$)。

挫折体験の重大さとの関連 “主観的な辛さ”、“重要度”、“予測不可能性”からなる挫折体験の重大さと“同化”、“調節”との関連を検討するために相関分析を行った。相関は偏相関係数を算出した (Table 3)。その結果、“調節”と“主観的な辛さ” ($r=.20, p<.001$)，“重要度” ($r=.27, p<.001$) との間には有意な弱い正の偏相関が見られ、“予測不可能性” ($r=.08, p<.05$) との間には有意な極めて弱い正の偏相関が見られた。一方で“同化”と“主観的な辛さ” ($r=-.16, p<.001$)，“予

測不可能性” ($r=-.26, p<.001$) との間には有意な弱い負の偏相関が見られ、“重要度” との間には有意な偏相関は見られなかった ($r=-.05, n.s.$)。

考 察

本調査の目的は、意味づけにおける同化・調節尺度を作成し、尺度の信頼性、妥当性の検討を行うことであった。

意味づけにおける同化・調節尺度は14項目で2因子からなり、先行研究に基づいた想定どおりの因子構造が確認された。不採用となった項目は、予備調査を基にした項目案で、同化1項目、調節1項目の計2項目、King & Hicks (2009) を基にした項目案で、同化1項目、調節1項目の計2項目、島井・大竹 (2005) を基にした項目案で、同化2項目、調節1項目の計3項目であった。したがって、特定の観点に限定された尺度構成ではなく、さまざまな知見を取り入れた包括的な尺度構成となったと考えられる。加えて、各因子の内的整合性も十分な値を得られたことから、尺度の信頼性が確認された。

本尺度の妥当性に関しては、構成概念妥当性の検討によって確認した。調節と認知的熟慮性が正の偏相関を示したため、仮説 (a) は支持された。自身の持つ物事の見方や考え方をええようと試みることで意味づける調節は、その出来事に対して時間をかけて対処していくことが必要となるため、認知的熟慮性との間に関連が示されたと考えられる。しかし相関は許容される程度の値であることから、時間をかけなくとも調節に至る場合も考えられ、調節を用いた対処の中でも個人差があることが示唆された。

またコーピングとの関連を検討した結果、調節のみ問題焦点型コーピングと弱い正の偏相関が示された。したがって仮説 (b) は支持された。問題焦点型コーピングとは、その状況において生じている問題を解決することを通してストレス値を減じようとすることを目的とした対処方略である (斉藤・菅原, 2007)。したがって、調節はストレスフルな出来事に対して積極的に関与していく対処方略であることが示された。加えて、調節、同化どちらも情動焦点型コーピングと弱

い正の偏相関が見られた。情動焦点型コーピングとは、ストレス状況で喚起された不快な情動を鎮め、調整するための対処方略である（斉藤・菅原，2007）。したがって、同化と調節どちらの意味づけでも、不快情動の緩和を試みているという共通の特徴があると考えられる。さらに同化のみ回避・逃避型コーピングと弱い正の偏相関が示された。回避・逃避型コーピングとは、ストレス状況との関わりを避ける対処方略である（斉藤・菅原，2007）。同化は、ストレスフルな出来事から得られた情報を無視し、自身のこれまでの物事の見方や考え方を維持していくので（Payne et al., 2007）、関わりを避けるというより、関わる必要がないと捉えたことで、回避・逃避型コーピングと許容される程度の値ではあるが、正の偏相関が示されたものと考えられる。またコーピングは状況依存的なコーピングと個人が頻繁に用いる比較的安定した特性的コーピングがあるとされている（Stanton, Kirk, Cameron, & Danoff-Burg, 2000）。本調査で同化、調節とコーピングとの関連が低かった理由として、重大なライフイベントに対する意味づけという状況依存的なコーピングに加え、特性的コーピングの影響もあったものと考えられる。

加えて体験の重大さを規定する要因として、主観的な辛さ、重要度、予測不可能性を上げ、同化、調節との関連を検討した。偏相関分析の結果、調節はすべての変数と正の偏相関が示され、同化は負の偏相関または無相関が示された。したがって仮説（c）は支持された。しかし偏相関は有意ではあるものの、弱い値しか示されなかった。この点については、挫折体験の重大さを規定する要因がほかにもある可能性が考えられる。本調査では予備調査からの回答を基に3つの要因を同定し検討を行ったが、ほかにも仮定世界の崩壊の程度（Janoff-Bulman, 1992; Payne et al., 2007）や無力感の程度（Linely & Joseph, 2004）などが体験の重大さを規定する要因として挙げられている。今後はほかの規定因についてさらなる検討が必要であろう。

本調査により、これまで仮説生成を目的とした理論的検討に留まっていた意味づけの過程について、同化と調節の観点から、実証的に検討する初めての尺度が開発されたと言える。しかし統計的な分析の結果、妥

当性に関して、仮説は支持されたものの十分な値は得られなかった。その理由について以下に3点考察する。

1点目は、尺度の項目に含まれる“意味”という言葉の多義性である。Davis et al. (2000) は“意味”が意味することはさまざまであると指摘しており、本調査においても、明確な定義を示していない。したがって、回答者によって“意味”という言葉の捉え方が異なる可能性が十分に考えられる。2点目は、本尺度は、体験を経験した当初の意味づけについて回答を求める回顧法を採用している点である。意味づけに関する先行研究では、体験を経験した初期の意味づけはほとんど検討されておらず、現在の意味づけを測定し、現在のストレスや適応との関連の検討が中心であった（Park, 2010）。しかし Jeavons, Greenwood, & Horne (2000) は体験の初期の認知が、その後のストレスと強い関連を示していることを明らかにしており、体験に対する初期の意味づけを検討することは、意味づけのプロセスを明らかにしていくうえで、未検討かつ重要な視点であると考えられる。したがって本尺度では、体験を経験した当初の意味づけについて回答を求めた。しかし、当時の考えを想起して回答する場合は、現在の考えについて回答するよりも、記憶が曖昧であるために、不確かな回答となる可能性が考えられる。3点目は、体験からの経過時間の統制や制限を行っていない点である。ストレスフルな出来事をあげる際に、過去3年や5年といった時間的枠組みを設けている研究もあれば（たとえば、羽鳥，2008; Tedeschi & Calhoun, 1996）、期間を限定せず、ストレスフルな出来事の回答を求めている研究もある（たとえば、松下，2008; 宅，2005）。時間的枠組みを設けることで、より時間的に近接した体験をあげさせることができ、体験の想起が容易になるという利点はあるものの、本尺度では、回答者にとって最も大きな体験の意味づけについて検討する意義を重視し、時間的枠組みを設けることなく、“これまで経験した最も大きな挫折体験”に対する意味づけを検討した。しかし回顧法である点と合わせ、回答の信頼性、妥当性が高く保たれているかは、今後さらなる検討が必要であろう。

本調査によって作成された尺度を踏まえて、今後の

意味づけ研究の展望について4点述べる。1点目は同化と調節の関連について明らかにしていくことが求められる。同化と調節は相互に排他的なプロセスではなく、同時に起こるとされている (Block, 1982)。本調査でも正の相関が示されたように、1つの出来事に対して、同化と調節がどのようなプロセスを経て意味づけがなされていくのか明らかにする必要があると考えられる。2点目は、意味づけにおける同化・調節尺度とパーソナリティ要因や文化的要因、年齢特有の要因といった個人特性との関連を同定していくことが求められる。体験の重大さなど状況要因も意味づけに影響を及ぼすと考えられるが、意味づけを行う個人内要因も意味づけを検討するうえでは考慮する必要があることが多くの研究で言われている (Brenda, Skaggs, Cecilia, & Barron, 2006; Joseph & Linley, 2005; Fjelland, Barron, & Foxall, 2007; Payne et al., 2007)。今後は、認知、感情特性、パーソナリティ要因との関連や、意味づけに関係が深いとされる宗教観や信仰心との関連の検討を行い、また本調査とは異なる年齢集団に対する検討を行うことで、意味づけという現象をより多面的に捉えることができると考えられる。3点目は、同化と調節が生成された意味や、その後の適応、精神的健康にもたらす影響について、その特徴や機能を明らかにすることが求められる。意味づけを行うことは、疾病の進行の抑制や生理学的な予防にも役立つことが言われているが (Bower, Kemeny, Taylor, & Fahey, 1998; Taylor, Kemeny, Reed, Bower, & Gruenewald, 2000)、意味づけの過程が異なると、その後の適応に対する影響も異なることが指摘されている (Manne, Ostroff, Fox, Grana, & Winkel, 2009)。したがって、同化と調節それぞれが、生成された意味や、その後の適応、精神的健康にどのような影響を与えるのか明らかにしていくことが今後の課題と言えるであろう。4点目は、本調査では挫折体験に対する意味づけを検討したが、ほかのストレスフルな出来事への本尺度の応用可能性について検討する必要がある。同化と調節という意味づけの過程は、特定の体験に対するものではないので (Payne et al., 2007)、今後、疾病や障害、災害、喪失体験などほかのストレスフルな出来事に対しての検討を行い、尺度の適用範囲を拡大し

ていくことが、臨床的介入への有意義な示唆を得るためにも望ましい。

以上に述べたように、意味づけ研究は未だ発展途上段階であり、今後検討、解決していかなければならない課題も山積している。また本調査で開発された尺度に関しても、仮説は支持されたものの、妥当性についてはさらなる検討の余地が残ると考えられる。そのため追試検証を行い、妥当性の確認を行うことも必要であろう。しかしながら本尺度は、意味づけの過程について、同化と調節の観点から測定する初めての尺度であり、今後の実証研究において活用されることが期待される。

引用文献

- 安藤清志 (2009). 否定的事象の経験と愛他性 東洋大学社会学部紀要, 47, 35-44.
- Block, J. (1982). Assimilation, accommodation, and the dynamics of personality development. *Child Development*, 53, 281-295.
- Bower, J. E., Kemeny, M. E., Taylor, S. E., & Fahey, J. L. (1998). Cognitive processing, discovery meaning, CD4 decline, and AIDS-related mortality among bereaved HIV-seropositive men. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 66, 979-986.
- Brandstadter, J. (2002a). Searching for paths to successful development and aging: Integrating developmental and action-theoretical perspectives. In L. Pulkkinen & A. Caspi (Eds.), *Paths to successful development: Personality in the life course*. New York, NY: Cambridge University Press, pp. 380-408.
- Brandstadter, J. (2002b). Protective processes in later life: Maintaining and revising personal goals. In C. VonHofsten, & L. Backman (Eds.), *Psychology at the turn of the millennium, vol. 2: Social, development, and clinical perspectives*. Florence, KY: Taylor & Francis/Routledge, pp. 133-152.
- Brenda, G., Skaggs, B. G., Cecilia, R., & Barron, C. R. (2006). Searching for meaning in negative events: Concept analysis. *Journal of Advanced Nursing*, 53,

- 559-570.
- Burnell, G. M., & Burnell, A. L. (1989). Clinical management of bereavement: A handbook for healthcare professionals.
- Davis, C., & Morgan, M. (2008). Finding meaning, perceiving growth, and acceptance of tinnitus. *Rehabilitation Psychology*, **53**, 128-138.
- Davis, C., Nolen-Hoeksema, S., & Larson, J. (1998). Making sense of loss and benefiting from the experience: Two construals of meaning. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 561-574.
- Davis, C., Wortman, C. B., Lehman, D. R., & Silver, R. (2000). Searching for meaning in loss: Are clinical assumptions correct? *Death Studies*, **24**, 497-540.
- Fjelland, J. E., Barron, C. R., & Foxall, M. (2007). A review of instruments measuring two aspects of meaning: Search for meaning and meaning in illness. *Journal of Advanced Nursing*, **62**, 394-406.
- Folkman, S., & Moskowitz, J. (2000). Positive affect and the other side of coping. *American Psychologist*, **55**, 647-654.
- Frankl, V. E. (1969). *The Will to Meaning - Foundations and Applications of Logotherapy*. New American Library, New York. (フランク, V. E. 山田邦男 (監訳) 今井伸和・高根雅啓・岡本哲雄・松田美佳・雨宮 徹 (訳) (2002). 意味への意志 春秋社)
- Frazier, P., Tennen, H., Gavian, M., Park, C., Tomich, P., & Tashiro, T. (2009). Does self-reported post-traumatic growth reflect genuine positive change? *Psychological Science*, **20**, 912-919.
- Freud, S. (1917). *Mourning and melancholia*. Standard edition. London: Hogarth Press. (フロイト, S. 井村恒郎・小此木啓吾他 (訳) (1970). 悲哀とメランコリー 「フロイト著作集第6巻」 人文書院)
- Gangstad, B., Norman, P., & Barton, J. (2009). Cognitive processing and posttraumatic growth after stroke. *Rehabilitation Psychology*, **54**, 69-75.
- 羽鳥健司 (2008). 極めてストレスフルな出来事に対して行われる積極的困難受容がその後の精神的健康に与える影響について 東京成徳大学臨床心理学研究, **8**, 3-10.
- 羽鳥健司・小玉正博 (2009). 我々は困難な状況でどう成長するのか—困難体験に対する肯定的意味づけの視点から ヒューマン・ケア研究, **10**, 101-113.
- Janoff-Bulman, R. (1992). *Shattered assumptions: Towards a new psychology of trauma*. New York: Free Press.
- Janoff-Bulman, R., & Frantz, C. M. (1997). The impact of trauma on meaning: From meaningless to meaningful life. In M. Power & C. Brewin (Eds.), *Attribution: Perceiving the causes of behavior*. Morristown, NJ :General Learning Press, pp. 1-26.
- Jeavons, S., Greenwood, K. M., & de L. Horne, D. J. (2000). Accident cognitions and subsequent psychological trauma. *Journal of Traumatic Stress*, **13**, 359-365.
- Joseph, S., & Linley, P. A. (2005). Positive adjustment to threatening events: An organismic valuing theory of growth through adversity. *Review of General Psychology*, **9**, 262-280.
- 神谷俊次・伊藤美奈子 (1999). 挫折体験の受容と有能感 日本教育心理学会総会発表論文集, **41**, 548.
- King, L. A., & Hicks, J. A. (2006). Narrating the self in the past and the future: Implications for maturity. *Journal of Research in Human Development*, **3**, 121-138.
- King, L. A., & Hicks, J. A. (2009). Detecting and constructing meaning in life events. *The Journal of positive psychology*, **4**, 317-330.
- 北村晴朗 (1983). 挫折体験の意味 (「おちこぼれ新論」〈特集〉) 教育と医学, **31**, 479-485.
- Kübler-Ross, E. (1969). *On Death and Dying*. MacMillan, New York. (キューブラー・ロス 川口正吉 (訳) (1971). 死ぬ瞬間: 死にゆく人々との対話 読売新聞社)
- Linley, P. A., & Joseph, S. (2004). Positive change following trauma and adversity: A review. *Journal of*

- Traumatic Stress*, **17**, 11–21.
- Manne, S., Ostroff, J., Fox, K., Grana, G., & Winkel, G. (2009). Cognitive and social processes predicting partner psychological adaptation to early stage breast cancer. *British Journal of Health Psychology*, **14**, 49–68.
- 松下智子 (2008). ネガティブな経験の意味づけ方の変化過程—肯定的な意味づけに注目して—九州大学心理学研究, **9**, 101–110.
- 永井 徹 (1993). 心のたくましさを育てる—挫折体験に負けない—児童心理, **47**, 617–621.
- Neimeyer, R. A. (2002). *Lessons of Loss: A Guide to coping (2nd ed)*. New York: Brunner Routledge.
- (ニーメヤー, R. A. 鈴木剛子 (訳) (2006). 〈大切なもの〉を失ったあなたに—喪失を乗り越えるガイド—春秋社)
- Nerken, I. R. (1993). Grief and the reflective self: Toward a clearer model of loss resolution and growth. *Death Studies*, **17**, 1–26.
- 尾関友佳子 (1993). 大学生用ストレス自己評価尺度の改訂—トランスアクションな分析に向けて—久留米大学大学院比較文化研究科年報, **1**, 95–114.
- Pakenham, K. I. (2008). Making sense of caregiving for persons with multiple sclerosis (MS): The dimensional structure of sense making and relations with positive and negative adjustment. *International Journal of Behavioral Medicine*, **15**, 241–252.
- Park, C. L. (2010). Making sense of the meaning literature: An integrative review of meaning making and its effects on adjustment to stressful life events. *Psychological Bulletin*, **136**, 257–301.
- Payne, A. J., Joseph, S., & Tudway, J. (2007). Assimilation and accommodation processes following traumatic experiences. *Journal of Loss and Trauma*, **12**, 75–91.
- Phelps, L. F., Williams, R. M., Raichle, K. A., Turner, A. P., & Ehde, D. M. (2008). The importance of cognitive processing to adjustment in the first year following amputation. *Rehabilitation Psychology*, **53**, 28–38.
- 斉藤瑞希・菅原正和 (2007). ストレスとストレスコーピングの実行性と志向性 (I)—ストレスとコーピングの理論—岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, **6**, 231–243.
- 島井哲志・大竹恵子 (2005). 日本版「人生の意味」尺度 (MLQ) の開発—日本ヒューマンケア心理学会第7回大会発表論文集, 29–30.
- Stanton, A. L., Kirk, S. B., Cameron, C. L., & Danoff-Burg, S. (2000). Coping through emotional approach: Scale construction and validation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 1150–1169.
- Steger, M. F., Frazier, P., Oishi, S., & Kaler, M. (2006). The Meaning in Life Questionnaire: Assessing the presence of and search for meaning in life. *Journal of Counseling psychology*, **53**, 80–93.
- 杉浦京子 (1997). 心の傷はどう癒されるか—挫折感と喪失感の克服—児童心理, **51**, 49–54.
- 滝間一嘉・坂本 章 (1991). 認知的熟慮生—衝動性尺度の作成—信頼性と妥当性の検討—日本グループダイナミクス学会第39回大会発表論文集, 39–40.
- 宅 香菜子 (2005). ストレスに起因する自己成長感が生じるメカニズムの検討—ストレス体験に対する意味の付与に着目して—心理臨床学研究, **23**, 161–172.
- Taylor, S. E., Kemeny, M. E., Reed, G. M., Bower, J. E., & Gruenewald, T. L. (2000). Psychological resources, positive illusions, and health. *American Psychologist*, **55**, 99–109.
- Tedeschi, R. G., & Calhoun, L. G. (1996). The post-traumatic growth inventory: Measuring the positive legacy of trauma. *Journal of Traumatic Stress*, **9**, 455–471.
- Widows, M. R., Jacobsen, P. B., Booth-Jones, M., & Fields, K. K. (2005). Predictors of posttraumatic growth following bone marrow transplantation for cancer. *Health Psychology*, **24**, 266–273.

(2012.4.16 受稿, 2013.6.20 受理)